

ビバハウス便り No. 57 どうしても、若者たちに、冬も働ける職場を！

ビバハウス 運営委員長 安達俊子

しらじらと夜が明け、この原稿を書きながらふと時計を見ると3時半を回っている。ビバハウスでは、まず一番に、鶏3家族が（親子3羽が2組、若夫婦が1組）目を覚ます。“朝が来たよ！ビバの皆さん、起きる時間だよ！早くご飯にしようよ！”とばかりに、声を競って、鳴き声をあげる。5時ごろになれば、カラスを初め、ほかの鳥たちもいっせいに1日の活動を開始する。

本州から1ヶ月ほど前にビバに来た女性メンバーは、“鳥の声の違いから、ビバの周りには、いろいろな種類の鳥たちがいるんだなと思ったし、小鳥のさえずに誘われて、毎朝目を覚ます、こんな生活ができるなんて！”と声を弾ませて語ってくれた。

鳥も虫も、周りの草花や樹木も、自らの生命の輝きを、1年中で一番鮮やかに私たちに感じさせてくれるこの季節に、全国から、ビバハウスとビバ塾合わせて20名以上の若者たちを迎え入れ、ともに暮らせる幸せを毎日実感している。

厳しい暑さの日が続いているが、本当のところは、夫も私もこのところ、寒い冬の日のことばかりを毎日考えている。何とか、今年の冬こそ、毎日、明日若者たちに何の仕事をしてもらうか悩まないようにしたい思いでいっぱいだからだ。あの2004年の18号台風で、若者たちにとって冬の職場としてかけがいのない2つの椎茸園が一瞬にして奪われた。（ビバハウス便り NO.33）実際のところ、今日に至るも尚私たちはこの痛手から、完全には回復していない。特に昨年冬のように、暖冬で雪の少ない冬は恐怖そのものだった。この3月末まで、唯ひとりのビバの正職員として頑張ってくれた、森指導員と毎晩、明日の仕事のことで頭を悩ませない日はなかった。

それ以前の年のように、豪雪の朝が毎日続く場合は、全員でまずビバの玄関先から除雪を始め、時には、教育福祉村の本部前までの除雪まですれば、ほぼ午前中の労働になってしまった。また余市町や、福祉施設などからも、除雪ボランティアの要請も次々に入った。雪が少なければ、そんな仕事さえないのだ。

去年の冬は、ビバスコレの近藤芳二校長先生の「余市の歴史講座」で、フゴッペ洞窟、運上屋などの見学5回、講義学習5回の10日間の学習で、ようやく冬場を乗り切り、雪解け前の仁木町フルーツパークのコテージ清掃の仕事に引き継いだ。

今年の冬からは、なんとしても継続的な若者たちの仕事を作りたい。幸いなことに、ビバも参加して、7月7日に実施した、第1回の「よいち、よいとこマーケット」（よいち生協隣の喫茶店テラス会場）に参加された皆さんの中に、ビバの若者たちの冬の仕事作りに協力したいという方々も居られて、今後共同で計画を具体化していくお約束をしていただいた。ビバとしても、これまで考えてきた、地域のひとり暮らしなどで、なかなか食事を作れなくなってきたお年寄りの皆さんに、手作りの夕食などを提供する仕事に本格的に着手したい。調理師免許を持つ女性メンバーが来てくれた事もありがたいことだ。